大池容子×ビルケント大学『かがやく都市』共同制作　オブザーバー・レポート

ミッリイェット・サナト誌　編集者
バラン・ダヌシュ

国際交流基金は、日・トルコ外交関係樹立 100 周年を記念し、トルコの首都アンカラにあるビルケント大学との共同制作事業のため、劇団「うさぎストライプ」を主宰する劇作家・演出家の大池容子を 2024 年 10 月から 11 月にかけて約 4 週間現地に派遣した。

同大学の 2 年生と 3 年生の中から選ばれた学生が役者として参加した本事業は、4 週間にわたる共同制作とその後の公演を通じて、大池と学生らの交流から生まれる新たな知見を獲得することを目的とした。

“都市の中の孤独”の物語である『かがやく都市』は 2024 年 11 月に、同大学の小劇場にて初演が行われた。同作品はその後、11 月 16、19、26 日及び 12 月 3、10 日に上演され、2025 年 2 月 22 日には、チャンカヤ区ドアン・タシュデレン現代芸術センターにおいても上演された。

上演概要

日付：2024 年 11 月 16、19、26 日、12 月 3、10 日、2025 年 2 月 22 日
上演時間：１時間 10 分
会場：ビルケント大学内劇場

スタッフ

作・演出：大池容子
翻訳：イナン・オネル
翻案・通訳：セナ・デミラー
演出助手：金澤昭
照明：ユルマズ・エルテキン
プロジェクト・コーディネーター：ギゼム・ギュレル
松崎：スラ・カラダシュ
佐々木華：イレム・ナズ・アロール
石野：ムスタファ・サリフ・アルタイ
佐々木譲：ブラク・トプタシュ
謎の女：エリフ・エキズオール
技術アシスタント：アクン・チャルシュカン
技術スタッフ：
エリフ・イェシル、エミリー・ニルヤ・アクタシュ、

ジェンギズ・ウゼル・ケチェオール、ペリン・ビルシュ・ブダク
技術・通訳サポート：オヌル・アルプ・ティンギズ
事務：エブル・カヤ・シャフスバル
広報・デザイン：アイチャ・エレン

第１部：事業のはじまり

1986 年大阪出身の大池は、2010 年 4 月より、日本の代表的な劇作家である平田オリザ主宰の青年団の演出部に所属。同年 10 月に「うさぎストライプ」を旗揚げした。2019 年 3 月、二人の父親と一人の娘による“ありふれた”家族の姿を描いた『バージン・ブルース』で平成 30 年度 希望の大地の戯曲賞「北海道戯曲賞」大賞を受賞。2021 年 12 月、脚本を手懸けた NHK 特集ドラマ『いないかもしれない』で Asian Academy Creative Award 2021 Best Original Screenplay 優秀賞を受賞。2024 年 4 月、日本大学芸術学部演劇学科助教に就任。近年の脚本作品に、土曜ドラマ『パーセント』、夜ドラ『未来の私にブッかまされる！？』（いずれも NHK 総合）などがある。

1985 年、トルコの現代演劇の重鎮であるジュネイト・ギョクチェルが音頭を取って設立されたビルケント大学演劇学科は、私立大学としては国内初の演劇専門学科である。同学科は学部生を優れた演劇人として養成することを目的とし、国際的な評価を受けている講師陣が教育活動を行っている。現代的なスタジオと舞台を有し、トルコ国内外で活躍する人材を輩出すべく洗練されたカリキュラムによる教育を行っている同学科は、演劇を志す多くの学生にとって、第一志望先となっている。

大池は 2023 年 11 月にトルコを訪問し、広くトルコの舞台芸術関係者や劇場、大学等と意見交換を重ねた。その中で、トルコで最初に設立された私立大学であるビルケント大学の演劇学科が大池との共同制作に関心を示し、今回の事業実現に至った。

本事業は、大池とビルケント大学の学生らが交流を通じた新たな知見を獲得すること、さらにはその成果としての公演を広くトルコの観客や舞台芸術関係者に観劇せしめ、今後のさらなる両国間の舞台芸術交流の促進させること、そして日本文化紹介に寄与することを目的としている。

『かがやく都市』について

～あらすじ～
工場の煙に包まれた小さな街にある、高校の美術室。
三年生の松崎と二年生の華が、「都市計画」の授業を担当する教師・石野を待ちながら心理テストで時間を潰していた。
石野はかつてこの街に、何もない広場を設計したことがある。

その広場の近くで工場を営んでいるのは、華の兄・譲。彼は、周りから「宇宙人」と呼ばれていた。
やがて謎の女が松崎の前に現れ、自分の夫を攫った宇宙人を見なかったかと尋ねる。

大池は『かがやく都市』について以下のように説明する。「本作は“都市の中の孤独”についての物語である。作中には”宇宙人”と呼ばれる他者から理解されないキャラクターが登場するが、地球人同士であってもお互いを理解することは難しく、現代人は皆どこか寂しさを抱えながら生きているのではないだろうか。それでも他者と繋がりたい、と願う人々の姿を描くために本作を制作した。初演は２０２２年１１月（日本）である。」

また、大池は自身の演劇観について、以下のように語った。「日本演劇の歴史をふりかえると、伝統演劇の後、新劇と呼ばれる流れが生まれた。当時、より多くの西洋劇が翻訳・翻案され、上演された。この流れに対抗する形で『アングラ』と呼称しうる流れが生まれた。加えて、『静かな演劇』という流れも生まれた。『静かな演劇』では、ありふれた日常生活を描く。『静かな演劇』の旗手が平田オリザであり、私が影響を受けている人物である。平田の様式の肝は、観劇後、認識の変化をもたらすことである。平田は、ありふれた日常生活の中にも変化や違いがあること意識させる劇を目指している。私は特に平田の会話劇のスタイルに影響を受けている。他方で、１つの舞台の中で３つの異なる空間を使い、少し荒唐無稽さを足しているところで、差異を作り上げている。」

2024 年 9 月には、『かがやく都市』出演俳優の選考のため、ビルケント大学にてワークショップを実施した。

--選考に際して、どのような点に注意したか
大池：『かがやく都市』の戯曲を使用せず、別のテキストを使用してグループワークを行った。普段からオーディション等で使用しているテキストである。このテキストの特徴は、ありふれた台詞の流れの中にいくつか空欄を入れている点にある。この空欄部分に、役者はグループワークの形で自由に台詞を埋めてもらった。このグループワークを通じて、『かがやく都市』に合う役者を選んだ。

--過去にこのような形で国際共同制作を実施した経験はあるか
大池：国際共同制作としては初めてだが、別の形では経験がある。本事業実施の契機となった国際交流基金の Youtube チャンネルにおける舞台芸術作品の多言語字幕付配信事業に際して、国際交流基金に協力したことがある。昨年（2023 年）11 月には、上記事業で公開した作品を土日基金文化センターにて上映した。

--トルコ文化に合わせるために『かがやく都市』の戯曲に変更を加えたか

大池：日本独自の様式のままとした。登場人物の名前、通貨、劇中使用する「モノポリー」に似たボードゲームである「人生ゲーム」といったものは変更することなく、そのままにした。その方が劇中の舞台が日本であることが理解しやすいためである。一方、稽古の過程でトルコの観客に文化的に理解されないであろう要素や日本文化が理解の妨げになるものについては変更することを検討している。しかし、これらは大きな変更とは言えない。このため、観客も日本の劇であると認識できるであろう。

第２部：稽古

劇の稽古は 2024 年 10 月 24 日から 11 月 14 日にかけてビルケント大学内の劇場にて行われた。演出助手の金澤昭は最初の１週間、稽古に参加し、11 月１日に日本へ帰国した。残りの稽古は大池のみで続けられた。

10 月 24 日、初日の稽古は読み合わせに終始した。読み合わせにより理解出来ない部分や学生（役者）のフィードバックが焦点となった。

翌日からは役者も舞台に立ち、稽古が続けられた。『かがやく都市』は、複数の場面を１つの舞台で表現する。場面は舞台上のベンチ、机といった舞台道具で切り替えるため、あるシーンが終わり、別のシーンが始まる際、役者の舞台の出入りとそのスピードが肝となる。

役者がはじめて舞台に立って稽古を行った際、この点が最重要課題となった。一方の大池は初日の読み合わせで役者が違和感を表明した部分や理解できない台詞の対応を課題としていたが、関係者は皆、和気藹々とした良い雰囲気であった。

演出助手の金澤も大池と同様の感想を持っていた。金澤は、読み合わせを経て役者が舞台稽古に移り、本事業がある意味で具現化したことに高揚したようで、「事業が立ち上がった時には少し不安を感じていたが、稽古の始まりで不安よりも興奮と幸福感が勝った。日本で舞台制作を行う際も、同じような興奮や感情で始まるが、役者も似た感情であると見受けられ、この点において違いはない。」と述べている。

稽古において、重要事項として頭に浮かぶのが、言語（と実際には文化）が役者と演出家の間で問題を孕むのかどうかという点である。通訳であるセナ・デミラーは稽古を通して、演出家と役者の間のコミュニケーションを成功裏に進めた。他方、戯曲、役者、演出家の間の関係性はどのようなものだったのか。

--本事業を通じて最も困難であった点は何か。文化や言語といった点は障壁となっていたか。
ブラク・トプタシュ（佐々木譲役）：通訳を伴う稽古は一定期間、難しく感じた。しかし、優れた通訳がいたことは幸運であった。このことで、日本文化とそのニュアンスの理解がより容易であった。

--稽古に際して、言語が問題となることはあるか。
大池：劇作家として問題と感じることはない。戯曲の翻訳は日本語版との対照表のような形で準備した。この表を用いて台詞の進行を追うことができている。役者のボディ・ランゲージ等によって、彼らがどのように表現したいかは理解できる。

金澤：トルコ語を全く理解できなくとも、私には問題なく稽古を進めることができている。戯曲の中身を知っているので、どの場面であるかは理解できる。場面外で大池が説明する際には通訳がついている。稽古が進むにつれて、自分たちも互いのことや、それぞれの振る舞いを理解できるようになる。

稽古を通して、演出家と役者の間のコミュニケーションが遮られることは無かった。新たな提案や双方が問題視する点はオープンな形で議論され、舞台上でポジティブな効果を生んだ。大池は、何らかの理由で役者が集中力を切らしたり、気持ちが乗っていない際には、彼らのモチベーション管理に注意を払っていた。加えて、辛抱強く落ち着いた対応を崩さなかった。役者たちも戯曲の中身を理解しようと努め、その全てを舞台で表現できるよう、稽

古を真剣に取り組んでいた。
--本事業へのアプローチ、稽古での取り組み方、演劇に対する認識のような観点において、日本とトルコの役者とで違いはあるか。
大池：現代日本演劇において、アドリブはそこまで用いない。稽古、本番含め、すべてにおいて戯曲に忠実である。対してトルコでは少しアドリブが許容されているように見受けられた。

金澤：そこまで両国の違いを感じていない。確かに日本では戯曲に忠実であろうとする役者がいるが、役者によって様々である。それもあって実際には大した違いはない。

稽古期間中、最も筆者の関心を惹いたのは、初演１、２日前に起きた議論である。劇終盤の場面の確認をし、稽古も終わりにさしかかっていたある晩、役者のブラク・トプタシュ（佐々木譲役）とムスタファ・サリフ・アルタイ（石野役）が、テーブルで会話をする場面において納得がいかないところがあると述べた。これまでにも、似たようなやりとりは度々起きており、議論の末、ひとつずつ解決されていった。しかし、今回に関しては、通し稽古を経ておそらくは役者も劇を深く理解できるようになったため、全ての役者が自身の至らない点を自覚し、大池と議論する場へと変わった。役者と大池は向かい合って座り、どうすればより良い上演にできるかという議論が行われた。ある場面では、大池の提案を受け入れ、別の場面では大池の提案を受け入れないという様子が見受けられた。単に本事業というよ

りも、アートやクリエイティビティという観点において興味深い議論であった。稽古におけるハイライトであったと言えよう。この議論の中で大池は劇の中身を崩さないという姿勢を取りつつも役者の考えを受け入れ折り合いをつける様子も見受けられた。議論の発端であった佐々木譲と石野の場面については、役者側は大池に対し、件の場面については自分たちに一任して欲しい（アドリブを許容して欲しい）と要求した。それに対し、大池は役者側のアドリブを受け入れることとなった。大池が指摘した、日本の現代演劇においてアドリブがそこまで用いられない一方、トルコはその逆であるという点を思い出すと、大池が役者のスタイルを考えて解決策を出したと見受けられ、本事業におけるポジティブな点の１つであると言えよう。

--これまで本事業のような国際共同制作に参加した経験はあるか。
イレム・ナズ・アロール（佐々木華役）：これまでにもアメリカ、イラン、ポーランドといった国々から招へいされたアーティストや演出家との複数の事業に参加した。しかし、日本の演出家との国際共同制作は私にとって初めてである。単なる劇への理解だけではなく、異文化交流の面白さと難しさを経験することが出来たと言える。

--大池とトルコの演出家を、劇へのアプローチ、稽古の進め方、劇の認識のような観点から比較した際、どのようなことが言えるか。
エリフ・エキズオール（謎の女役）：大池とのクリエーションに際して、コミュニケーションと相互理解が最重要事項であった。大池は役者各々に自然なクリエーションをさせ、登場人物ごとの型にはまった役作りを求めなかった。作品の枠組みの上で、自分は自由に役作りをした。個人的に会話をすると、大池は純粋で思慮深い演出家であった。こうした大池の人柄により、役者として不満に感じることや、頭から離れない悩みを気軽に相談することができた。

舞台道具の主立ったものはビルケント大学演劇学科が手配した。他方、劇中登場する本、飲み物、石といった小道具は役者が個人的に準備した。この点も本事業に役者がどのくらい主体的に参画しているかを示す上で重要であろう。

第３部：初演と反響

劇の初演は 2024 年 11 月 15 日にビルケント大学演劇学科内の劇場で上演された。満席で上演となった初演は、限られた稽古時間であったにも関わらず、大成功をおさめた。筆者がまず感じたのは、観客の好意的な反応である。役者もそれを感じて同様の温度感で呼応し、パフォーマンスの質が上がる要因となった。
すべての芸術作品がそうであるように、好意的な反応だけではなく、批判的なものも確か

にあった。初演後の観客の反応の一部には、古典作品のようではないため、劇を理解することが難しいという声もあった。また、戯曲の難しさが、役者が役に入り込んで演じることを困難にしているのではないかという意見もあった。

©Ayça Eren

--本事業を総括すると、どのような心境か。本事業を始める時と初演後で心境に違いはあるか。
スラ・カラダシュ（松崎役）：率直に言うと、初めて戯曲を読んだ時に思い浮かべていたものと実際に演じたものとでは大きな違いがあった。上演後の観客の評価によって、大池が何を作り出そうと考えていたのか、そして自分たちがどれほど良い事業を成し遂げたのか理解することができた。期待をはるかに超え、別次元の終着点に達することができたと言える。

--『かがやく都市』は一役者として何をもたらしたか。
ムスタファ・サリフ・アルタイ（石野役）:『かがやく都市』は何かを伝えるのに方法は１つではないということを教えてくれた。これまでに学んだシンプルな演技のアプローチでは本作中の場面によっては自身を異質のように感じても、演劇において正解・不正解はなく、異なる認識に対しても適応する必要があると気づいた。本事業では自分の演技の幅を広げることだけではなく、新しいことにもオープンな態度で臨むことを学んだ。

ジェイソン・ヘイル・ビルケント大学演劇学科・学科長と本事業のコーディネーターを務

めたギゼム・ギュレル同学科講師は初演後の取材に対し、以下のように答えた。

ジェイソン・ヘイル：ビルケント大学演劇学科は国際的な視座に立って、演劇にかかる教育を提供している。舞台芸術教育においては、国際的なコラボレーションを行うことを重視している。毎年、演劇、国際フェスティバル、ワークショップ、ツアー等の事業に我々が招へいする国際的なアーティストや演出家によって、世界中のプラットフォームで活躍するアーティストを養成している。

今回、日・トルコ外交関係樹立 100 周年に際して、国際交流基金と在トルコ日本国大使館から本事業の提案があり、学科長として嬉しく思っている。日本の現代劇作家である大池を本学科に招へいし、２、３年生の学生とクリエーションを実施でき、大変光栄である。本学科として、アートの連帯の力を信じており、両国の芸術面における友好関係が本事業によって深まることとなれば幸いである。

©Ayça Eren

ギゼム・ギュレル：大池による『かがやく都市』の戯曲は、世界の現代演劇の潮流の中で、日本の演劇による独自のアプローチが反映された、新しく魅力的なものである。大池は暗喩的な手法で、孤独という概念について緻密でかつ独特なスタイルで劇として表現している。日本出身で自分独自のスタイルを持つ女性演出家を迎えたことは、学科生の学習過程において大変良い刺激となった。本事業において、両国間の関係団体との協力やアートの融合に立ち会うことができ、自分にとっても特別な経験となった。

大池は初演後、役者について以下のように述べた。「トルコ渡航前は、役者は同じ大学で学んでいるため、演技のスタイルは画一的なものではないかと思っていた。しかし、稽古が進むにつれ、役者各々のスタイルや能力は異なっており、得意な部分と苦手な部分も役者によりまちまちであった。日本においても実際のところ同じである。役者は皆、役をモノにしていた。軽微なミスがあってもすぐに仕切り直していると見受けられた。トルコの役者はアドリブを入れる傾向にあるが、このスタイルも気に入った。トルコの演劇スタイルはもっと“ソフトな”ものであると感じた。」

大池と役者による、異なる文化的出自を持つ人々が一堂に会し、意味ある作品を生み出そうとする奮闘を取材することができ、筆者としても望外の喜びである。共に活動する人々の関係性が徐々に深まる様を観察すること、短い休憩時間のフランクな（通訳を介した）立ち話、議論における意見の相違、かと思えば歩み寄り、初演後に役者が大池を壇上に上げ称えたこと、そして別れ・・・、これらは地理的・文化的に離れて暮らす人々が、実は肩を並べて同じ地点に立ち、皆が同じストーリーを共有していることを示している。

最後に、本事業は、日・トルコが文化関係において、将来実施するであろう共同事業において励みとなり、かつインスピレーションを与えるものであると筆者は考える。

©Ayça Eren

バラン・ダヌシュ
記者、編集者
1982 年アンカラ生まれ。2005 年ビルケント大学芸術学部コミュニケーション・デザイン学科卒業後、同学科の修士課程を修了（専門：映画)。修了プロジェクトとして第 6 回トビリシ国際映画祭に参加。広告会社、Web サイトおよび雑誌で執筆・編集活動に従事。複数の媒体での勤務を経て、現在ミッリイェット・サナト誌で造形美術分野の編集を務める。